

## [別紙 2]

### 審査の結果の要旨

氏名 西森 美奈

本研究は、周術期患者の QOL を維持、向上する目的で、  
(調査 1) 周術期患者の QOL を下げる要因の一つである術前不安のスケール the Amsterdam Preoperative Anxiety and Information Scale (APAIS) の日本語版作成およびその信頼性、妥当性の検討

(調査 2) 健康なボランティアである骨髄ドナーの周術期 QOL を評価し、周術期における QOL 変化および回復期 QOL に影響を与える因子についての評価、検討を行ったものであり、下記の結果を得ている。

1. APAIS 日本語版の Cronbach's alpha 係数は、不安スケールで 0.84、情報希求度スケールで 0.68 であった。因子分析では 2 因子が抽出され、この 2 因子で全体の分散の 70% を占めた。APAIS 不安スケールと STAI との相関係数は 0.66 であった。女性、高い情報希求度が術前不安の強さと有意に関連し、内外の先行研究による知見と一致した。以上の結果から日本語版 APAIS の信頼性と妥当性が高いことが確認された。(調査 1)

2. ドナーの骨髄採取前の SF-36 スコアは全てのサブスケールにおいて国民標準値より高く、ドナーのベースライン QOL が一般国民より良好であることが分かった。(調査 2、以下同じ)

3. 退院一週間後のドナーの QOL の身体的側面が大きく低下したのに対し、精神的側面と全体的健康感は高い値を維持したことから、回復期におけるドナーの問題点が主に身体的なものであり、精神的には骨髄採取術に良く耐えていることがわかった。

4. 上記の身体的側面の QOL 低下が、同時期の骨髄採取部および腰部の痛みの程度と強く関連していたことから、骨髄採取に伴う痛みが回復期の日常生活を妨げる主な要因であることがわかり、術後疼痛対策の強化が必要であることがわかった。

5. 女性であることおよび骨髄採取時間の長いことが、身体的側面の QOL 低下の予測因子であることが分かった。また、現行の骨髄採取量の上限 (20ml/kg) 以内であれば、骨髄採取量および術後の貧血の程度は回復期 QOL に影響しないことがわかった。

6. 骨髄採取 3 カ月後までには、SF-36 は全てのサブスケールでベースラインに戻っていることがわかった。

以上、本論文調査 1 では術前不安特異的スケールである APAIS 日本語版信頼性、妥当性を確認した。APAIS は質問数が少なく短時間で回答できるため、今後、我が国の臨床、研究両面で有用な指標となり、医療の質向上を目指した周術期患者評価に向けて重要な貢献をなすと考えられる。また、調査 2 では、骨髄ドナーの QOL 評価を行い、ドナーの QOL が骨髄採取後長期的に妨げられないことを確認した。さらに骨髄採取直後の問題点を明らかにし、ドナーの身体的負担を軽減するためには疼痛対策を強化すべきという介入可能な新しい知見を得た。骨髄ドナーの QOL に関する先行研究はなく、本研究により得られた知見は、今後、ドナー候補者からインフォームドコンセントを得る際に提供すべき正確な情報として重要であり、骨髄移植医療に重要な貢献をなすと考えられる。以上から、本研究は学位の授与に値するものと考えられる。